ふくしまレッドリスト（2025年版）見直しの理由

番号	生物群名	目名	科名	和名	学名	ふくしまRL2024 （旧）カテゴリー	ふくしまRL2025 カテゴリー	見直しの理由	参考文献
1	昆虫類	アザミウマ目	アザミウマ科	ハネナシアザミウマ	*Apterothrips secticornis* (Trybom, 1896)	情報不足	情報不足	学名の綴りに誤りがあったため，修正する。	
2	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	コヒョウモン	*Brenthis ino* (Rottemberg, 1775)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	かつては桧枝岐村大津岐でも記録されていたが，現在では尾瀬（尾瀬ヶ原，尾瀬沼）からの記録しかなく，尾瀬が唯一の生息地であろう。直近最後の記録は2016年の尾瀬ヶ原であるが（渡辺，2017），2024年，2025年の調査では生息が確認されず，危機的水準にまで減少していると考えられる。尾瀬は特別天然記念物，尾瀬国立公園の特別保護地区であるため，環境維持は徹底されているが，湿潤な草原，渓畔などの湿地を好む本種にとって気候変動に起因する乾燥化が原因で危機的な状況になっているものと思われる。 絶滅危惧I類の定性的要件，「既知のすべての個体群で，危機的水準にまで減少している。」，「既知のすべての生息地で，生息条件が著しく悪化している」，に該当する。	渡辺　浩（2017）新・福島県の蝶，ワタコ出版，石川町． 水野谷昭三（1998）南会津地方及び県南地方の蝶3種．ふくしまの虫，（16）：57-58． 環境庁（1978）日本の重要な昆虫類東北版．福島県，大蔵省印刷局． 田添京二（1976）福島県におけるコヒョウモンの記録．福島生物，（19）：41． 八島淳一郎（1976）尾瀬ヶ原のコヒョウモン，福島生物，（19）：43．
3	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	ギンボシヒョウモン	*Speyeria aglaja fortuna* (Janson, 1877)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	県内各地でこの10年間，本種の生息状況調査が精力的に実施されてきたが，まったく確認されていない。直近の最後の記録は2013年の県レッドリスト改訂調査時の桧枝岐村キリンテでの報告である（渡辺，2020）。過去の記録も会津地方を中心としたわずかしかなく，原因は不明ではあるものの，すべての個体群で危機的水準にまで減少していると考えられる。なお，他県の状況から，本種は福島県だけではなく，東北全県でほぼ壊滅的な状況ではないかとの見方が多い。 絶滅危惧I類の定性的要件，「既知のすべての個体群で，危機的水準にまで減少している」に該当する。	松岡有樹（2023）猪苗代町で採集したギンボシヒョウモンの記録，InsecTOHOKU，（63）：12． 渡辺　浩（2020）福島県蝶類データベース（2020年版），InsecTOHOKU，特別号No.4． 郡司正文（2019）猪苗代町で採集したギンボシヒョウモンの古い記録，InsecTOHOKU，（47）：6． 斎藤修司（1986）山都町で分布が確認できた蝶類96種．福島生物，（29）：21-28． 小島吉男（1999）安達太良山でギンボシヒョウモンを目撃．ふくしまの虫，（18）：13． 佐藤三国（1985）岩瀬村の蝶追加記録．ふくしまの虫，（3）：5． 本間敏弘（1949）ギンボシヒョウモン福島県に産す．新昆虫．　2(12)：31．
4	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	フタスジチョウ	*Neptis rivularis* (Scopoli, 1763)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	これまでの報告は1960年の檜枝岐村での記録以降，桧枝岐村，舘岩村（現南会津町）だけである。直近の記録は2012年の奥只見ダム（檜枝岐村）であるが（渡辺，2017），この場所は新潟県境付近であり，新潟県で発生した個体の飛来の可能性もあり，発生地としては疑問が残る。奥只見以外の檜枝岐村，舘岩村からの記録はそれぞれ1976年，1984年以降なく，福島県内では危機的な水準にまで減少していると考えられる。 絶滅危惧I類の定性的要件，「既知のすべての個体群で，危機的水準にまで減少している」，に該当する。	渡辺　浩（2017）新・福島県の蝶，ワタコ出版，石川町． 美ノ谷憲久・福田晴男（1989）福島県舘岩村におけるフタスジチョウの食餌植物について，Neptis，（2）：36． 黒澤良彦（1983）南会津のフタスジチョウ，月刊むし，（154）：35． 田添京二（1974）福島県産の蝶相，らふぁえりす，（2）：1-5．
5	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	キマダラモドキ	*Kirinia fentoni* (Butler, 1877)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	1990年以降の本種の生息確認記録は，二本松市といわき市の2ヶ所のみである。現在，唯一生息が確認できている二本松市麓山（羽山）周辺の生息地では，狭い範囲ではあるが個体群が維持されてきた。しかし，2025年には確認される個体数が著しく減少し，同時に生息地での風力発電施設建設に伴う森林伐採や林道の舗装工事が進んでいる。いわき市川前町小白井からの生息確認が報告されたのは2013年が最後である。両生息地での個体群ともに危機的水準にまで減少していると考えられる。 絶滅危惧I類の定性的要件，「既知のすべての個体群で，危機的水準にまで減少している」，に該当する。	山本直樹（2020）福島県でホシミスジとキマダラモドキの斑紋異常個体を採集，月刊むし，（595）：50-51． 渡辺　浩（2017）新・福島県の蝶，ワタコ出版，石川町． 鈴木智史（2008）猪苗代町で採集したキマダラモドキの記録，InsecTOHOKU，（22）：5． 鈴木智史（2004）いわき市川前町で採集した蝶，InsecTOHOKU，（8）：2-3． 阿部駿太郎（1999）いわき市で採集した蝶の記録，ふくしまの虫，（18）:135． 冨田國男（1992）裏磐梯のキマダラモドキ，ふくしまの虫，（10）：30． 松崎有光（1981）福島県いわき市産蝶類最近の知見，ちょうちょう，4(5)：43-53．
6	昆虫類	チョウ目	タテハチョウ科	ツマジロウラジャノメ	*Lasiommata deidamia interrupta* (Fruhstorfer, 1909)	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	県内各地でこの10年間，本種の生息状況調査が精力的に実施されてきたが，2024年の昭和村での1例が唯一の記録であり，本種は10年間で極端に見られなくなった種の一つである。林道奥の沢沿いの露岩地やガレ場を好み，そのような場所に生育する食草に産卵する。そのため，安全確保による沢沿いの法面補強工事などにより，生息環境が急速に失われている。かつては福島市内にも生息地があったが，再発見されていないなど，大部分の個体群で個体数が大幅に減少しており，大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 絶滅危惧II類の定性的要件，「大部分の個体群で個体数が大幅に減少している」，「大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある」に該当する。	渡辺　浩（2020）福島県蝶類データベース（2020年版），InsecTOHOKU，特別号No.4． 渡辺　浩（2017）新・福島県の蝶，ワタコ出版，石川町． 田口四十三（2003）ツマジロウラジャノメの異常型を採集，InsecTOHOKU，（6）：3． 福島虫の会調査班（1994）福島市摺上川上流域の昆虫，ふくしまの虫，（12）：3-14． 塩田義隆（1985）県南地方における蝶類について，県南の生物，（第1集）：67-85． 鈴木　弘（1991）福島市の蝶（Ⅰ），ふくしまの虫，（9）：8-10． 風間静雄（1934）蝶二種の採集地，昆蟲世界，（38）：182．
7	昆虫類	チョウ目	セセリチョウ科	ホシチャバネセセリ	*Aeromachus inachus inachus* (Ménétriès, 1859)	準絶滅危惧	絶滅危惧II類	阿武隈高地を中心に県内に広く棲息地が点在していたが，最近では石川町，桑折町，二本松市など絶滅したと判断される生息地，平田村のような個体数が明らかに減少した生息地も多い。本種の生息地は樹林が混じる山地原野とされるが，実際には山頂などの狭い範囲に集中している場合が多く，幼虫の食草も自然環境下ではオオアブラススキに限定されるようで，生息環境に不安定要素が多い。生息地は各地に点在し，県北に健全な個体群が維持されている生息地もあるが，大部分の個体群で個体数が大幅に減少していると考えられる。 絶滅危惧II類の定性的要件，「大部分の個体群で個体数が大幅に減少している」に該当する。	渡辺　浩（2020）福島県蝶類データベース（2020年版），InsecTOHOKU，特別号No.4． 西原幸雄（2020）只見町でホシチャバネセセリを採集，InsecTOHOKU，（53）：12． 酒井敏光（2015）喜多方市でホシチャバネセセリを採集，ふくしまの虫，（33）：35． 渡辺　浩（2010）石川地方の蝶類調査記録(2001年以降)，InsecTOHOKU，（25）：2-10． 郡司正文・阿部駿太郎（2003）葛尾村でホシチャバネセセリを採集，InsecTOHOKU，（6）：2． 鈴木智史（1992）いわき市川前町小白井芋島で得た若干の蝶類，ふくしまの虫，（10）：18． 手代木求（1964）南郷村和泉田近辺の蝶類．福島県の蝶目録，（2）：1-6．
8	鳥類	チドリ目	シギ科	ツルシギ	*Tringa erythropus* (Pallas, 1764)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	本種の県内における記録は相馬市といわき市からのみで飛来地は限られている。また、2011年以降の記録は12件あるが、断続的な記録である。飛来数が少ない上、震災後に本種が飛来していたような水田や休耕田は圃場整備などにより、その環境が失われていることや干潟や河口などの生息環境が悪化し、シギ・チドリ類が全体的に減少傾向にある。以上のことから、「絶滅危惧i類」の定性的要件（基地のすべての生息地で、生息環境が著しく悪化している。）に該当すると考えられる。	福島県森林整備課（1996）ふくしまの野鳥． 福島県生活環境部環境共生領域 自然保護グループ（編）（2002）レッドデータブックふくしま I絶滅の恐れのある野生生物　植物・昆虫類・鳥類． 日本野鳥の会いわき支部（2015）いわき鳥類目録2015～野鳥とともに歩んだ50年　画像満載の記録集～． 福島県日本野鳥の会連携団体連合会（2016）福島県鳥類総目録． 日本野鳥の会福島県相双支部（2024）創立30周年記念誌　松川浦の野鳥．

ふくしまレッドリスト（2025年版）見直しの理由

番号	生物群名	目名	科名	和名	学名	ふくしまRL2024 （旧）カテゴリー	ふくしまRL2025 カテゴリー	見直しの理由	参考文献
9	淡水魚類	ヤツメウナギ目	ヤツメウナギ科	キタスナヤツメ	*Lethenteron mitsukurii* (Hatta,1901)	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	2024年に、スナヤツメ類を含むカワヤツメ属について、分類学的整理に関する研究論文が発表され、「スナヤツメ北方種」とされていたものに「キタスナヤツメ」という和名が与えられた(Sakai et al.,2024)。この見解に基づき、レッドリスト2025では、スナヤツメ北方種を「キタスナヤツメ」とした。 県内では、阿武隈川水系や新田川水系、夏井川水系など太平洋流入河川に在来分布するほか、日本海側に注ぐ阿賀野川水系の支流にも在来分布している。	Harumi Sakai, Akihisa Iwata, Katsutoshi Watanabe and Akira Goto (2024) Taxonomic re-examination of Japanese brook lampreys of the genus Lethenteron with descriptions of two new species, Lethenteron satoi sp. nov. and Lethenteron hattai sp. nov., and re-description of Lethenteron mitsukurii. Ichthyological Research　DOI：10.1007/s10228-024-00997-7稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類. 福島生物, (53):19-32. 稲葉修(2025)奥会津の淡水魚たち　-雪とブナの山々に支えられて、生きる-, 奥会津7町村文化施設間連携企画展「奥会津の川」平成12年度企画展報告書, 198-210.
10	淡水魚類	ヤツメウナギ目	ヤツメウナギ科	ミナミスナヤツメ	*Lethenteron hattai* Iwata,Sakai and Goto,2024	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧ⅠB類	2024年に、スナヤツメ類を含むカワヤツメ属について、分類学的整理に関する研究論文が発表され、「スナヤツメ南方種」とされていたものが新種となり、「ミナミスナヤツメ」として記載された(Sakai et al.,2024)。この見解に基づき、レッドリスト2025では、スナヤツメ南方種を「ミナミスナヤツメ」とした。 県内では、阿賀野川水系に在来分布し、いくつかの支流から確認されている。浜通り側の太平洋流入の3河川からも確認されたが、これらの分布地では関西以西からの放流魚が多く、遺伝的な解析結果も踏まえ、移殖分布と考えられる。	Harumi Sakai, Akihisa Iwata, Katsutoshi Watanabe and Akira Goto (2024) Taxonomic re-examination of Japanese brook lampreys of the genus Lethenteron with descriptions of two new species, Lethenteron satoi sp. nov. and Lethenteron hattai sp. nov., and re-description of Lethenteron mitsukurii. Ichthyological Research　DOI：10.1007/s10228-024-00997-7稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類. 福島生物, (53):19-32. 稲葉修(2025)奥会津の淡水魚たち　-雪とブナの山々に支えられて、生きる-, 奥会津7町村文化施設間連携企画展「奥会津の川」平成12年度企画展報告書, 198-210.
11	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	マツカサガイ広域分布種	*Prondularia* cf. *japanensis* 1	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	国内に生息するマツカサガイは、これまで*Pronodularia japanensis*の1種とされてきたが、近年の分子系統解析の結果、3種に分けられる種群であることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020）。このうち、東北地方の日本海側、新潟県、北陸、中国地方、四国、九州の広い範囲に分布する個体群には、マツカサガイ広域分布種*Prondularia* cf. *japanensis* 1の新称が与えられている（近藤 2020）。Lopes-Lima et al. (2020)では、福島県のマツカサガイ類の分布状況は十分には報告されていなかったが、会津など日本海につながる水系でマツカサガイ類の生息が確認されてきたので、このマツカサガイ類はProndularia cf. japanensis 1と判断した。 会津でのもともとの生息地は少なく、近年の水路の護岸化やマニアの乱獲によってより激減している。	Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Lee, H. J., Kim, K. S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toria, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki., H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J., Goncalves, V. A., Klishko, K. O., Konopleva, S. E., Vikhrev, V. I., Sayenko, M. E., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, E. A. & Froufe, E. 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. Mol. Phylogenet. Evol. 146: 1-27. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294-296.
12	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	マツカサガイ北東本州固有種	*Pronodularia* cf. *japanensis* 3	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	国内に生息するマツカサガイは、単一*Pronodularia japanensis*とされてきたが、近年の分子系統解析の結果、3種に分けられる種群であることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020）。このうち、関東地方から東北地方の太平洋側に分布する個体群には、マツカサガイ北東本州固有種*Pr.* cf. *japanensis* 3の新称が与えられている（近藤 2020）。 県内では、太平洋側に注ぐ浜通り側と中通りの河川流域の水路や溜池などに在来分布しているが、圃場整備による水路の護岸化やマニアの乱獲により減少している。特に中通りと浜通り南部で激減している。	Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Lee, H. J., Kim, K. S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toria, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki., H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J., Goncalves, V. A., Klishko, K. O., Konopleva, S. E., Vikhrev, V. I., Sayenko, M. E., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, E. A. & Froufe, E. 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. Mol. Phylogenet. Evol. 146: 1-27. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294-296.
13	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	ヌマガイ	*Sinanodonta lauta*	情報不足 ※ドブガイ類として	絶滅危惧Ⅱ類	国内産のドブガイ類について、近年の分子系統解析の結果、複数種に分けられることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020; Sano et al. 2022）。この論文では、本県産の個体も解析されており、浜通り3か所の個体群が本種とされた。ただし、どの生息地も個体数は少なく、一部の生息地は東日本大震災により被災し、現在の確認が困難になっている。	Sano, I., Saito, T., Ito, S., Ye, B., Uechi, T., Seo, T., Do, V. T., Kimura, K., Hirano, T., Yamazaki, D., Shirai, A., Kondo, T., Miura, O., Miyazaki, J.-I. & Chiba, S. 2022. Resoloving species-level diversity of *Beringiana* and *Sinanodonta* (Bivalvia: Unionidae) in the Japanese archipelago using genome-wide data. Mol. Phylogenet. Evol. 175, 107563. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2022.107563. 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294-296.
14	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	ヒラヌマガイ	*Sinanodonta plana*	情報不足 ※ドブガイ類として	絶滅危惧Ⅱ類	これまで、「ドブガイ属」、「タガイ属」とされてきた国内のドブガイ類については、Sano et al.（2022）による殻の形態や遺伝子解析の結果により、10種に分けられることが判明した。その後、「ドブガイ属」について更に詳細な調査が行われ、今回、本種が新種として報告された（Sano et al. 2025）。この新種記載には、本県浜通り産の個体も報告されている。 東日本手大震災による被災によって減少した生息地があるほか、一部の生息地では水質の悪化やマニアの乱獲により減少している。	Sano, I., Saito, T., Ito, S., Ye, B., Uechi, T., Seo, T., Do, V. T., Kimura, K., Hirano, T., Yamazaki, D., Shirai, A., Kondo, T., Miura, O., Miyazaki, J.-I. & Chiba, S. 2022. Resoloving species-level diversity of *Beringiana* and *Sinanodonta* (Bivalvia: Unionidae) in the Japanese archipelago using genome-wide data. Mol. Phylogenet. Evol. 175, 107563. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2022.107563 Sano, I., & Kondo, T. 2025 Revision of *Sinanodonta* Species (Bivalvia: Unionidae) native to Japan with description of two new species. Venus, 83(1-4): 43-55. https://doi.org/10.18941/venus.83.1-4_43
15	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	タガイ	*Beringiana japonica*	情報不足 ※ドブガイ類として	絶滅危惧Ⅱ類	国内産のドブガイ類について、近年の分子系統解析の結果、複数種に分けられることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020; Sano et al. 2022）。これらの論文では、本県産の個体も解析されており、浜通り3か所の個体群が本種とされた。ただし、どの生息地も個体数は少なく、一部の生息地は東日本大震災により被災し、現在の確認が困難になっている。	Sano, I., Saito, T., Ito, S., Ye, B., Uechi, T., Seo, T., Do, V. T., Kimura, K., Hirano, T., Yamazaki, D., Shirai, A., Kondo, T., Miura, O., Miyazaki, J.-I. & Chiba, S. 2022. Resoloving species-level diversity of *Beringiana* and *Sinanodonta* (Bivalvia: Unionidae) in the Japanese archipelago using genome-wide data. Mol. Phylogenet. Evol. 175, 107563. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2022.107563. Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Lee, H. J., Kim, K. S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toria, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki., H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J., Goncalves, V. A., Klishko, K. O., Konopleva, S. E., Vikhrev, V. I., Sayenko, M. E., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, E. A. & Froufe, E. 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. Mol. Phylogenet. Evol. 146: 1-27. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294-296.

ふくしまレッドリスト（2025年版）見直しの理由

番号	生物群名	目名	科名	和名	学名	ふくしまRL2024 （旧）カテゴリー	ふくしまRL2025 カテゴリー	見直しの理由	参考文献
16	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	キタノタガイ	*Beringiana gosannensis*	情報不足 ※ドブガイ類として	絶滅危惧Ⅱ類	国内産のドブガイ類について、近年の分子系統解析の結果、複数種に分けられることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020; Sano et al. 2022）。これらの論文では、本県産の個体も解析されており、猪苗代湖の個体群が本種とされ、阿賀野川に流入する水路からも確認された。ただし、生息環境の悪化により、どの生息地も個体数は少ない。	Sano, I., Saito, T., Ito, S., Ye, B., Uechi, T., Seo, T., Do, V. T., Kimura, K., Hirano, T., Yamazaki, D., Shirai, A., Kondo, T., Miura, O., Miyazaki, J.-I. & Chiba, S. 2022. Resoloving species-level diversity of *Beringiana* and *Sinanodonta* (Bivalvia: Unionidae) in the Japanese archipelago using genome-wide data. Mol. Phylogenet. Evol. 175, 107563. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2022.107563 Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Lee, H. J., Kim, K. S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toria, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki., H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J., Goncalves, V. A., Klishko, K. O., Konopleva, S. E., Vikhrev, V. I., Sayenko, M. E., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, E. A. & Froufe, E. 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. Mol. Phylogenet. Evol. 146: 1–27. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294–296.
17	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	ヒガシタブネドブガイ	*Buldowskia kamiyai*	情報不足 ※ドブガイ類として	絶滅危惧Ⅱ類	国内産のタブネドブガイ属について、近年の分子系統解析の結果、複数種に分けられることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020）。この論文では、本県産の個体も解析されており、浜通り2か所の個体群が本種とされた。しかし、この生息地は東日本大震災による津波被災により、大半の生息域が壊滅状態となった。また、かろうじて残った個体も、復興工事により生息地が失われ、確認が困難になっている。中通りの生息地も開発行為により個体数が減少している。	Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Lee, H. J., Kim, K. S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toria, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki., H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J., Goncalves, V. A., Klishko, K. O., Konopleva, S. E., Vikhrev, V. I., Sayenko, M. E., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, E. A. & Froufe, E. 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. Mol. Phylogenet. Evol. 146: 1–27. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294–296.
18	淡水性二枚貝類	イシガイ目	イシガイ科	カタドブガイ	*Buldowskia iwakawai*	情報不足 ※ドブガイ類として	絶滅危惧Ⅱ類	国内産のタブネドブガイ属について、近年の分子系統解析の結果、複数種に分けられることが判明した（Lopes-Lima et al. 2020）。この論文では、本県産の個体も解析されており、会津2か所の個体群が本種とされた。しかし、現在の生息地は圃場整備事業や溜池の回収工事などにより大きく環境が変化し、更にマニアによる乱獲も加わって、本種を取り巻く環境は年々悪化している。Lopes-Lima et al. (2020)では、福島県のカタドブガイの分布状況は十分には報告されていなかったが、会津など日本海に接続する水系でタブネドブガイ属の生息が確認されたので、このタブネドブガイ属はカタドブガイと判断した。	Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Lee, H. J., Kim, K. S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toria, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki., H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J., Goncalves, V. A., Klishko, K. O., Konopleva, S. E., Vikhrev, V. I., Sayenko, M. E., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, E. A. & Froufe, E. 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. Mol. Phylogenet. Evol. 146: 1–27. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755 近藤高貴. 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん 50: 294–296.